社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第25号　2013（pp.21-30）

多面的な価値認識をめざす小学校社会科の授業構成

－第３学年単元「昔の道具と今の道具」の開発を事例として－

Designing Social Studies Lessons for Elementary School to Develop Values Formation: A Tentative Lesson Plan for Forth Grade of an Elementary School, “Tools and Old Tools Now”

紙　田　路　子
（浜田市立三隅小学校／兵庫教育大学連合大学院）

Ⅰ．はじめに

本研究の目的は，これまで提案されてきた自主的自立的な価値観形成をめざす授業構成論をふまえて，小学校児童の多面的な価値認識を保障する社会科授業を設計することである。

民主主義社会は個人の政治的な平等という基盤をもとに人々の多様な意見，価値観が尊重され，社会や国のしくみが決定される社会である。このような民主主義社会における市民には，一方的な価値観の注入に対抗し，主体的に意思決定を行うことのできる知識や能力，意欲が必要とされる。近年ではこのような市民的資質の育成を目的として，子どもの自主的自立的な価値観形成をめざす社会科授業が提案されるようになった。これらの授業論においては，日常生活における価値判断では意識することが少ない自らの価値観を対象化し，吟味させていくことが価値観形成の核となっている。

しかしながら小学校社会科授業では，子どもの価値観形成にかかわろうとする研究も見られるものの，主に中等教育段階に関して提案されている開かれた価値観形成論の成果を十分に反映できてはいない。その理由として以下の点があげられる。

１つは，小学校学習指導要領が，「人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の苦労や工夫を考えるようにする」「人々の生活の変化や人々の願い，地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする」[1] など，「人」に着目して「工夫・努力」の理解を目標に掲げている点にある。このような目標に基づく授業は，人物の生き方へ共感させ，そこから自分の生き方への示唆を得ることを促すように展開されることが多い。結果として形成される一面的な社会認識は，子どもの認識を閉ざすことになり，自主的自立的な価値観形成を保障しえない。

２つめは，小学校社会科授業で取り上げられる内容が価値を反省・吟味する価値形成論の授業過程と整合しないことである。価値観形成を扱った社会科授業として溝口和宏[2] と大杉昭英[3]，吉村功太郎[4] の社会科授業の構想は示唆に富むものであるが，３者が価値観形成のための教材として取り上げているのはいずれも制度や社会問題に関わる社会的判断である。大杉は，日本とアメリカにおける保険制度の違いを，溝口はたばこをめぐる裁判過程を，吉村はエイズの問題を子どもに分析・吟味させることで，社会的判断の背後にある価値を相対化させようとしている。小学校，特に中学年段階における社会科学習は，「商店」「町」「水道」「消防署」「農家の仕事」など子どもの生活と直接的につながりのある「人・もの・こと」に具体的に関わり，そのしくみを認識させようとするものである。社会認識が未熟な小学校児童に，社会問題や社会制度のような，直接的にとらえられない学習内容を解釈・理解させることは難しい。

以上の問題点を踏まえて本研究では，子どもの自主的自立的な価値判断能力の基盤となる，多面的な価値認識を保障する授業を設計しようとするものである。その具体的な方略として「もの」を分析対象とし，「もの」に具体化された価値が子どもたちの生活にもたらす影響を分析・吟味することで，価値を相対化する方法を取り入れる。ま

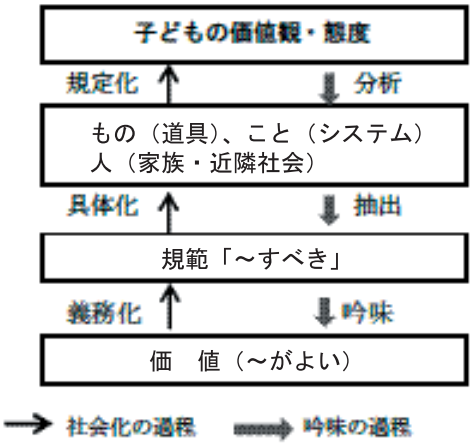
た，その授業構成原理を，家庭電化製品と島根県浜田市三隅町の特産品である「石州和紙」を取り上げた第３学年の単元「昔の道具と今の道具」の開発を通して示していくものである。

Ⅱ．多面的な価値認識形成のための教材選択の原理

価値とは，意思決定において考慮されることがらであり，「生起しうるさまざまな状態についての望ましさの規準」と定義される[5]。本研究における多面的な価値認識とは，社会的事象に内包される様々な「望ましさの規準」を認識することである。このような価値認識を保障することは，子どもが社会のあり方について主体的に選び取っていくことの素地となろう。

本研究では，小学校児童の多面的な価値認識を保障する授業の学習内容として価値が具体化された「もの」を取り上げる。「望ましさの規準」である価値は個々人によって異なるが，社会の多数の成員が共有している望ましさの規準や順序が，社会的価値である。「～がよい」という言説で表現される社会的価値は，政策や制度，社会的判断に内包されることで，私たちの生活を規定している。合理的意思決定や開かれた価値観形成など，これまで開発されてきた価値観形成に関わる授業は，主に社会論争問題を通して，政策や社会的判断の背後にある社会的価値を分析・吟味するものであった。政策や社会的判断は，現在の子どもの社会生活を規定する要素として重要なものであるが，子どもの社会生活との直接的な関連を見出しにくいものである。子どもが社会生活のあらゆる場面において，受容を迫られるのは行動様式であろう[6]。行動様式は「もの」や「システム」，あるいは「語り」を通して示される。図２は価値の社会化と吟味の過程を表したものである。

ある一定の価値が社会に受容されると，その価値は社会成員に対して「～すべきである」という義務を課すようになる。これが規範である。子どもは，様々な「人」に接し，「もの」を使い，水道や交通，ごみ処理など様々なシステム（「こと」）に関わることで，自然に価値が具体化された行動様式を身につけていく。この過程を通して，子どもは社会の側から伝えられる特定の価値を「あるべきもの」として内面化させていくことになるだろう。



【図２　価値の社会化と吟味の過程】[7]

しかしながら，子どもが社会のありかたについて主体的に考えていけるようにするには，社会が子どもに内面化させようとしている価値を一旦対象化して，客観的に吟味していくことが必要となる。そのための方略が「人・もの・こと」に内包される価値の相対化である。既知のものとは異なる，行動様式や「人・もの・こと」に出会ったとき，子どもは「なぜ」と探求をはじめる。そのときに，自らを規定する価値に気づき，他の価値に基づく「人・もの・こと」との対比を通して，吟味することができるであろう。

森川敦子は，８～９歳ごろから状況依存的な「社会的慣習（～すべき）」と一般的・自立的な「道徳（～正しい）」の概念区別を行うようになり，さらにこの時期の子どもは，「道徳」より「社会的慣習」を重視する傾向があることを明らかにしている[8]。このような子どもの発達段階も考慮し，小学校児童の多面的な価値認識を保障するには，子どもの行動様式を直接的に規定する「人・もの・こと」を分析対象とする授業がふさわしいと思われる。また，初等教育段階において，「人・もの・こと」を対象化し，その背後にある価値を分析・吟味する学習を行うことは，社会的判断を分析する中等教育段階以降の価値学習の素地にもなろう。

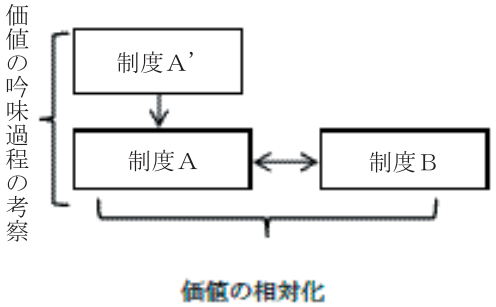
Ⅲ．多面的な価値認識を保障する小学校社会科授業過程

1　小学校社会科における価値観形成の原理

本研究は，小学生児童の多面的な価値観形成を保障する方略として，異なる価値を持つ複数の「もの」を分析対象とし，社会生活にもたらす影響からその背後にある価値を相対化する授業構成原理を提案する。

子どもの自主的自立的な価値観形成を保障する代表的な授業構成論として，大杉昭英，溝口和宏によるものがある。溝口は判断規準のより精緻な検討や異なる規準との対比により，個人の価値体系を知識として成長させることが可能であると主張し，開かれた価値観形成のための授業論を展開している[9]。大杉は，社会的事象の背後にある価値を「倫理的価値」としてとらえ，説明させることを通して子どもの価値観形成を保障する方略を示している[10]。開発した教授書においては，異なる「倫理的価値」とそれに基づく制度を比較対照させ，これまで自明視していた制度がもたらす社会生活への影響を分析することで，「倫理的価値」を相対化しようとしている。

図２で示したように，溝口の授業論が問題状況において価値が具体化される過程を示し，価値判断規準の精緻な検討により価値認識を成長させようとするものであるのに対し，大杉は異なる「倫理的価値」を持つ複数の制度を考察することで，制度を相対化し，そのあり方を検討させることを価値観形成の方略としている。



【図２　価値観形成の方略】

小学校中学年段階における社会認識とは，直接的に社会的事象と関わり自己と関連付けることによって，その意味を解釈することである[11]。子どもは日常生活の中で，様々な人やものと関わることで，社会を意味づけ，その解釈の背後にある価値をも受容する。社会化を通して形成されるこのような価値観は，一方的一面的なものになりがちである。このような一方的な社会化に対抗し，社会的事象に内包する多面的な価値を認識するには，自らを規定する価値を一旦対象化し，客観的に吟味していく必要があるだろう。小学校社会科授業においては，子どもの行動様式を規定する価値について明らかにした上で，生活にもたらす影響から批判的に分析し，吟味することのできる授業設計が適当であろう。このような授業設計は，価値の相対化の方略において可能である。

そこで本研究では，異なる価値を持つ複数の「もの」を，社会生活にもたらす影響から批判的に分析することで，価値を相対化し，多面的な価値認識を保障する授業を提案する。

2　授業構成原理

価値を相対化する価値学習を，「もの」の背後にある価値を相対化する「価値分析過程」と，当該の価値が社会に与える影響から批判的に検討する「価値吟味過程」から構成する。

（１）価値分析過程

「価値分析過程」は①個別的な「もの」の性質の理解，②「もの」の性質の背後にある価値の明確化，③価値がもたらす社会生活への影響の分析，④価値の相対化からなる。①「もの」の性質の理解では，具体的個別的な「もの」の変化の特徴と，時代別の「もの」の特徴を明らかにする。そして②において，「もの」の変化の背後にある価値について認識させるものである。③価値がもたらす社会生活への影響の分析では，②で確認した価値が，わたしたちの生活にどのような影響を与えているのか，あるいは与えてきたのかを考えることを通して，価値の意味に気づかせるものである。そして，④価値の相対化では，②で確認した価値とは異なる価値に規定される「もの」について認識する。その社会的意義を追求し，②の価値と比較することで「もの」についての価値は絶対的ではないこと，私たちの選択によって「もの」に関わる価値も変化しうるものであることを認識させ

ることが目的となる。

（２）価値吟味過程

「価値吟味過程」は，「価値分析過程」で吟味した価値に基づく「もの」が現時点でどのようになっているかを把握したうえで，それを自分なりに評価し，他者の評価と比較・調整したうえで価値について再評価を行うように構成される。「価値分析過程」において認識した複数の価値が，優先されたり制限されたりする場合の検討を通して，「もの」に対する多面的な価値認識を形成するのが「価値吟味過程」のねらいとなる。それは，①「もの」に関わる価値についての現状の把握，②価値についての評価，③他者の評価との比較による価値の再吟味，④価値の再調整の四段階となる。①では，それぞれの価値に基づく「もの」の現状を認識し，その理由を分析していく。②の段階では，価値に対する子ども自身の評価を促すものである。③の段階では，クラスの他の子どもの評価と比較することで，特定の価値が優先されたり制限されたりする場合を考慮しながら，自分の評価を再吟味していく。以上の段階を経て，④で価値の再評価を行うのである。

「もの」の背後にある価値を，私たちの生活に与える影響から多面的に捉えさせ，それぞれを吟味したうえで評価させる。それによって子どもの多面的な価値認識を保障することがねらいとなる。

Ⅳ．第３学年単元「昔の道具と今の道具」の単元開発

１　本単元で扱う価値

価値が具体化された「人・もの・こと」によって私たちの行動は秩序づけられ，統制される傾向にある。本単元において分析対象とするのは，市場主義的価値と伝統主義的価値という価値が具体化された道具である。

小学校社会科授業においては，小学校学習指導要領解説社会科編の内容（４）「人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の工夫や努力を考えるようにする」や内容（５）「地域の人々の生活の向上に尽くした人々の働きや苦心を考えるようにする」[12] 等を受けて，昔の道具という「もの」や，水道，消防のしくみといった「こと」に関わる人々の工夫や努力について考察させる展開となっている。効率性や使いやすさ，便利さを追求して「もの」や「こと」は発展し維持されてきたことをとらえさせようとするこうした授業展開は，効率性や成長を「よいこと」とする市場主義的価値を，子どもに自然に教えこむことになっているのではないか。確かにこれらの市場主義的価値に基づく生産様式は，私たちの生活を物質的に豊かにしてきた。しかしながら，市場主義的価値は万能ではない。近年では，市場主義経済の行き過ぎが原因のひとつとされる，環境破壊や格差の拡大，金融破綻など様々な社会問題が世界的規模で生じている。佐伯啓思はこの原因を過剰性にあるととらえている[13]。過剰性とは生産能力が生み出すものを吸収するだけの需要が形成されない状況を指している。現在の市場主義社会における社会問題の要因のひとつが「過剰性」にあるとすれば，「需要に対して供給が少ない」という「稀少性」の概念に基づいた「効率性」や「成長」の重視は適切な価値ではなくなる。近年では，こうした状況を鑑みて，新たな価値が模索されはじめている。現代社会の「稀少性」とは生産物でなく「社会生活の安全性と安定性である」という認識から，地域固有の風土や文化，人的ネットワークを見直し引き継いでいくことを是とする価値である。本研究では，このような地域固有の文化を生かそうする考えを伝統主義的価値と定義し，授業を設計した。

市場主義的価値と伝統主義的価値という相反する２つの価値に基づく道具を取り上げ，社会にもたらす影響から分析・吟味することは，社会化により形成された既存の価値観を相対化し，多面的な価値認識を保障する上で有効であると考える。

２　単元設定の理由

本単元で，市場主義経的価値に基づく道具としてとりあげるのは，高度経済成長期以後に急速に普及した洗濯機・冷蔵庫・テレビといった電化製品である。これらの道具のもたらす快適さや便利さを子どもたちは当たり前のものとして享受している。さらにはコマーシャルや広告を通して，より便利で快適さをもたらすことのできる道具がよい道具である，という価値を知らず知らずのうち

に受容している。これらの道具の普及が，労働時間の短縮や情報の伝達，衛生管理など生活・文化の発展に大きく貢献したことは否めない。しかしながら，効率・便利という側面だけを重視したこれらの道具が，地域固有の文化や人的つながりを衰退させる一要因となったことも事実である。

伝統主義的価値に基づくものとしては，島根県浜田市三隅町の特産品「石州和紙」を取り上げる。日本古来の製紙技術で作られる和紙は，江戸時代に隆盛を極めたものの，明治維新をきっかけに西洋の製紙技術が伝わると駆逐されていった。和紙が洋紙にとってかわられたのはコストパフォーマンスや効率性の面で洋紙に劣っていたからであろう。「石州和紙」も，明治から現代にかけて製造業者が減少し，衰退の一途をたどってきた。しかし，近年，その文化的価値を見直し継承していこうとする動きが活発化している。市場主義的価値とは異なる価値が見直され，それらを守ろうとする人々があらわれてきたためであろう。

価値の異なる２つの道具を，私たちの生活に与える影響から分析・吟味することで，無自覚に受け入れてきた価値を相対化できる。さらには，それぞれのもののよさや問題点を分析することで，そのあり方について検討することができる。このような点から，家庭電化製品と石州和紙は子どもの多面的な価値認識を保障するのに適した学習教材であると言えよう。

３　到達目標

単元の到達目標については後述する資料１の「２．到達目標」に示している。

「価値分析過程」に関する到達目標は，「安く手に入り，手間がかからずに，誰にでも同じようによい仕事ができることがよい」という市場主義的価値と「地域の材料や自然を生かし，熟練した職人の技術によって生産されることがよい」という伝統主義的価値をとらえることである。それは，家庭電化製品の「いろいろな機能がついた（多機能化）」「少しの作業でたくさんの仕事ができる（効率化）」「誰にでも手に入る（低価格）」という変遷の特徴と，それに反する和紙の「地元の材料の質に合わせ，自然の力を生かしながら，熟練した職人の手によって1枚1枚生産される」という特徴から分析される。

「価値吟味過程」についての到達目標は，石州和紙の「1889年には6337戸あった石州和紙の製造者は1969年（昭和44年）には10戸になり，1974年には８戸，現在は５戸に減少している」と「地域の人は海外で手漉きの実演を行ったり，ブータンと文化交流したり，ユネスコ無形文化遺産の一覧表に石州和紙が記載されたりして和紙のよさを積極的に伝えている」という事実認識から，市場主義的価値と伝統主義的価値が相対する現在の状況とらえることである。それぞれの価値が生活にもたらす影響を考慮した上で，価値の調整を行い，再評価を行うことがねらいとなる。

４　単元の展開

「もの」の背後にある価値に着目し，吟味することで多面的な価値認識を保障する第３学年社会科授業「昔の道具と今の道具」の教授書は，後述する資料１に示した。

（１）第１次「昔の道具を調べよう」

第１次は，「価値分析過程」の段階である。日常生活で使用する道具の特徴とその変遷について調べる活動を行う。見学や聞き取り，資料などの調査を通して獲得した道具についての情報を機能別，年代別にまとめていく。個々に資料１の「１．到達目標①」の縦の列，すなわち通時的な観点で調査活動を行った後，グループでのまとめ活動を通して共時的な観点から，年代別の道具の特徴を明らかにする。さらに全体的な話し合いの場で，道具の変化の背後にある市場主義的価値とそれが私たちの生活に与える影響について認識させる。

（２）第２次「なぜ三隅の和紙は残っているのだろう」

第２次も「価値分析過程」である。道具が「効率的に，価格が安く，誰にでも同じようによい仕事ができる」ことを目的として変化してきた結果，効率的でない道具は陶冶され，廃れてきた。しかしその反面，その価値に適っていなくても，現在まで残っているものがある。そのひとつが和紙である。洋紙と和紙の材料や作り方，用途を比較することで和紙の「非効率性」を確認した上で，「なぜ和紙は残っているのか」課題を設定し，調査活動を行う。

見学や聞き取り調査，話し合い活動を通して，和　　明らかにしていく。
紙の特徴を調べ，その価値や社会的意義について

【資料１　第３学年単元「昔の道具と今の道具」の教授書】

１．単元のねらい

市場主義的価値と伝統主義的価値に基づくもののよさや問題点をふまえ，それぞれの価値について評価し調整することで，多面的な価値認識を形成する。

２．単元の到達目標

①第１次の到達目標

ごはんをたく	特　徴	冷やして保存する	特　徴	洗濯	特　徴	共通点
○羽釜 江戸～昭和半ば	火加減をしっかりみながらかまどでごはんをたく。	○氷冷蔵庫 明治～昭和の半ば	氷を使って食品を冷やす。冷蔵庫に入れる氷は毎朝，氷屋が配達してきた。	○洗濯板・たらい 明治～昭和の半ば	洗濯物を支え，石けん水をみぞにためて，布にしみこみやすくしている。	・仕事をするには手間がかかる上技術が必要である。 ・道具の構造自体に仕事を効率的にこなすための工夫がある。
○ガス羽釜 明治～昭和前半	まきをくべなくてもガスの火でごはんがたける。	○家庭用電気冷蔵庫 昭和初期～	電気で冷やす。当時の値段は家が１軒買えるほどの値段だった。 内容量は124リットルで重さは157kg	○手回し洗濯機 昭和初期	洗濯物を洗剤を溶かしたお湯といっしょに入れ，ハンドルを回して洗濯する。	・電気やガスなどを使うようになった（電化） ・手作業が減り仕事が楽になった（機械化） ・誰にでも簡単にできる（標準化）
○電気炊飯機 昭和30年代～40年代	スイッチひとつでごはんがたける。			○電気洗濯機 昭和30年代～	スイッチを入れると機械が洗濯物を洗ってくれる	
○ＩＨ電気炊飯機ジャー 現在	ごはんをたいて保温ができる。玄米やおかゆなどもおいしくたける。	○冷凍冷蔵庫 現在	内容量は407リットルで重さは86kg。 環境に配慮したノンフロン型になっている。	○全自動洗濯機 現在	洗濯物を入れてスイッチをおすだけで，洗うところから乾燥まで自動的にできるようになった。	・いろいろな機能がついた（多機能化） ・少しの作業でたくさんの仕事ができる（効率化） ・誰にでも手に入る（低価格）
「ごはんをたく」道具の変化の特徴	・ごはんがスイッチひとつで，誰でもおいしくたけるようになった。	「冷やして保存する」道具の変化の特徴	・電気を使うことで，冷やす手間が減った。 ・重さが軽くてたくさん入るようになった。（使いやすくなった）	「洗濯」の道具の変化の特徴	・簡単に洗濯ができるようになった。 ・技術がなくても誰でもきれいに洗濯できる。	【価値】 ・安く手に入り，手間がかからずに，誰にでも同じようによい仕事ができることがよい。

②第２次の到達目標

紙の種類	特　　徴	価値
和　紙	・地元の材料に合わせて和紙の技法は発達してきた。 ・材料の質によって作り方を調整するのですべて手作業である。 ・特に流し漉きには熟練した技術が必要である。 ・大量生産できないため価格が高い。 ・自然の力を生かして生産している。 ○地元の材料の質に合わせ，自然の力を生かしながら，熟練した職人の手によって１枚１枚生産される。	・地域の材料や自然を生かし，熟練した職人の技術によって生産されることがよい
洋　紙	・木の皮だけでなく，幹など全部材料として使用するので大量生産できる。 ・すべて機械化され，効率的に生産されるので安価である。 ・薬剤を添加するので自然や人の力，材料の質に左右されず，均質に生産できるようになっている。 ○機械化により効率的に，均質な紙が大量生産できるしくみが整っている。	・安く，同じような質で，大量に生産できることがよい。

③第３次の到達目標

洋紙の普及のため，1889年には6337戸あった石州和紙の製造者は1969年（昭和44年）には10戸になり，1974年には８戸，現在は５戸に減少している。

地域の人は海外で手漉きの実演を行ったり，ブータンと文化交流したり，ユネスコ無形文化遺産の一覧表に石州和紙が記載されたりして和紙のよさを積極的に伝えている

比較・調整

①「安く，手間をかけずに，いつでもだれでも同じように作ること」がよい。

②「地域の材料や自然を生かし，熟練した職人の技術によって作ること」がよい。

使いやすくて安いものは，快適な生活に欠かせない。

質のよいものを使うようになれば，みんなが無駄遣いしなくなる。環境保護や伝統文化の維持にもなる。

・楽な生活のために，自然を犠牲にするのはよくない。機械や電気の力を頼らずにできることを増やしていったほうがよいのではないか。
・①を大切にしたら自然によくないし，②を大切にしたら不便になる。①と②のバランスをとりながら，生活を工夫する必要がある。

３．単元の流れ（全10時間）

第１次「昔の道具を調べよう」（４時間）
目標　電化製品の特徴を分析することによって，その背後にある「安い，効率的，標準的」という価値を認識する。

	発　問	資料	予想される発言と獲得される知識
①「もの」の性質についての理解	・「研究レポートを作ろう」で調べた，「昔の○○」について分かったことを発表しましょう。	２学期に作成した子どもの研究レポート	・昔の遊びはゲームはなく，めんこやおはじきなどの道具を工夫して使って遊んでいた。 ・集団で遊ぶことが多かった。 ・昔の履き物はわらや木など自然のものを利用したものが多い。
	・社会科では「昔の道具」について調べます。今，みなさんの周りにはどんな生活の道具がありますか。		・冷蔵庫・・・もの冷やして保存する ・掃除機・・・部屋をきれいにする ・洗濯機・・・服をせんたくする
	○これらの道具の昔の姿はどのようなものでしょう。また，これらの道具はどのように今のかたちに変化してきたのでしょう。みんなで調べてみましょう。		・みんなほうきではいていたのではないか。 ・洗濯は洗濯板を使って手で洗濯していたのではないか。 ・今と比べて不便だったのではないか。
②「もの」の背後にある価値の明確化	・資料や聞き取り調査から調べてわかったことを年代別，道具別に分けてまとめてみましょう。	【授業資料１】「昔の道具と今の道具」	【ごはんを炊く道具についてまとめ】 ・スイッチひとつで，誰でもおいしくたけるようになった。 ・手間がかからずたけるようになった。 ・ずっと釜についていなくてもいいので，空いた時間でほかのこともできるようになった。 ※以下表１のように各自で調べたい道具についてわかったことを分類・整理する。
	・それぞれの時代の道具の特徴について話し合いましょう。	各自で分類・整理した道具の特徴の表	【江戸時代から昭和の半ば】 ・仕事に手間がかかる。 ・仕事をするにはある程度の技術が必要である。 ・手作業で仕事しやすいような工夫がある。 【昭和30年代～40年代】 ・木や炭ではなく電気やガスを使うようになった。 ・手作業が減り，仕事が楽になった ・誰にでも簡単に仕事ができるようになった。 ・道具の価格は高く，簡単に手に入るものではなかった。 【現在】 ・簡単にできるだけでなく，いろいろな機能がついた。 ・少しの作業でたくさんの仕事ができるようになった。 ・値段も安くなって誰でも買えるようになった。
	○道具はどのように変化してきたと言えるでしょうか。		・道具は誰でも手にすることができ，少ない時間でたくさん，同じようによい仕事ができるように変化してきた。
	◎どんな道具がよい道具だと考えられてきたのでしょう。		**・安く手に入り，手間がかからずに，誰にでも同じようによい仕事ができる道具がよい道具だと考えられてきた。**
③価値の社会生活への影響	○このような道具を使うようになって私たちの生活はどのように変化してきたでしょう。	【授業資料２】「昔の生活の様子と今の生活の様子」	・仕事に時間がかからなくなった。 ・簡単に料理をしたり，そうじをしたりできるようになった。 ・冷蔵庫で食べ物が保存できるので，まとめ買いができるようになった。 ・道具を上手に使えなくなってきた。 ・電気をたくさん使うので，エコな生活を送れなくなった。 ・家族で協力して仕事をすることがなくなった。
	・「安い，手間がかからない，誰にでも同じようにできる」に当てはまらない道具もあります。どんな道具だと思いますか		・電気や機械を使わないものではないか。 ・手作業が必要な道具ではないか。 ・なぜそのような不便な道具が今でも使われているのだろう。

第２次「なぜ三隅の和紙は残っているのだろう」（４時間）
目標　石州和紙の特徴を分析することによって，「地域文化の重視，自然との調和，熟練した技術」という価値を認識する。

	発　問	資料	予想される発言と獲得される知識
④規範の相対化	・三隅の特産品「石州和紙」はどのようにして作られているのでしょう。	【授業資料２】「石州和紙の製造工程」	・自然の力を利用し，すべて手作業で行っている。 ・薬品を使用しないので，材料に合わせて同じ質の製品を作り上げるために熟練の技が必要になる。
	・みなさんがいつも生活で使っている紙は「洋紙」と言う紙です。洋紙はどのように作られているか，調べてみましょう。	【授業資料３】「洋紙の製造工程」	・木の皮だけでなく，幹など全部材料として使用するので一度にたくさん生産できる。 ・すべて機械で短い時間にたくさん作ることができる。 ・薬品を使って人の力，材料に左右されず，同じように生産できるようになっている。 ・電化製品と同じだ。
	○なぜ効率的でも安価でも誰にでも同じように作れない「石州和紙」が今でも作り続けられているのでしょう。	西田和紙工房の見学	・石州和紙は洋紙に比べて質が優れているのではないか。 ・洋紙に比べてよいところがあるのではないか。
	・実際に石州和紙を作っておられる西田さんに話を聞いてみましょう。 ・和紙の特徴をまとめましょう。	【授業資料４】「洋紙と和紙のちがい」 和紙と洋紙の実物	・地元の材料に合わせて和紙の技法は発達してきた。 ・材料の状態によって作り方を調整するのですべて手作業である。 ・特に流し漉きには熟練した技術が必要である。 ・大量生産できないため価格が高い。 ・自然の力を生かして生産している。 ・和紙は長い繊維がからまってできるので強靭でやぶれにくい ・通気性に優れている ・色落ちしにくい。 ・優れた質を持つ和紙は神楽の面や大蛇の胴に使用されている。 ・風土の違いから和紙は産地によって質に違いが出る。三隅の和紙は三隅でしか作ることができない。 ・和紙は地元の材料の質に合わせ，自然の力を生かしながら，熟練した職人の手によって１枚１枚生産されている。そのため破れにくく，通気性や保存に優れた紙ができる。
	○なぜ石州和紙は作られ続けているのでしょう。		・地域の素材を生かすため。 ・地域の自然を大切にしているから。 ・技を引き継いでいかなければならないから。 ・量では質を重視するから。 ・三隅でしか作ることのできない和紙をなくさないため。
	◎石州和紙を続けている人はどんな道具がよい道具だと考えているのでしょう。		**・地域の材料や自然を生かし，熟練した職人の技術によって生産された道具がよい道具だと考えている。**
	○和紙は私たちの生活にどのように関わっているでしょう。		・地域の誇りである。 ・石州和紙を使った神楽や伝統芸能もさかんである。 ・和紙は値段が高く，鉛筆で字を書くのにも適さない。わたしたちの生活にはあまりかかわりがないのではないか。 ・洋紙があれば生活には困らない。

第３次　これから大切にすべきこととは何か（２時間）
目標　「安い，効率的，標準的」と「地域文化の重視，自然との調和，熟練した技術」という価値について評価する。また話し合いを通して，多面的な価値認識を形成することができる。

	発　問	資料	予想される発言と獲得される知識
	・石州和紙の歴史年表をみて気づいたことを発表しましょう。	【授業資料５】「石州和紙の歴史」	・石州和紙は1000年以上も前から三隅で作られている。 ・1889年には6337戸あった石州和紙の製造者は1969年（昭和44年）には10戸になり，1974年には８戸，現在は５戸に減少している。
	○なぜ石州和紙の製造業者が減ってきたのでしょうか。		・和紙は値段も高い上，使いにくいから。（鉛筆で書きにくい） ・和紙は一日に少ししか生産できない。だから高い。安く，簡単に手に入る洋紙の方をみんなが使うようになったから。

①価値についての現状の把握	・「安く，手間をかけずに，いつでもだれでも同じように作る」ことと「地域の材料や自然を生かし，熟練した職人の技術によって作る」ことのどちらを大切にしているのですか。 ○地域の人は海外で手漉きの実演を行ったり，ブータンと文化交流したり，ユネスコ無形文化遺産の一覧表に石州和紙が記載されたりして和紙のよさを積極的に伝えています。それはどんな思いからでしょうか。 ・どちらの価値を大切にしているのですか。	【授業資料５】「石州和紙の歴史」	・①「安く，手間をかけずに，いつでもだれでも同じように作る」ことを大切にしている。 ・地域の文化を残したい。 ・和紙のすばらしさを伝えたい。 ・貴重な文化遺産である和紙をなくしたくない。 ・みんなに和紙を使ってほしい。 ・紙を大切に使ってほしい。 ・②「地域の材料や自然を生かし，熟練した職人の技術によって作る」ことを大切にしている。
②価値に対する評価	○みなさんは，これからどちらの価値を大切にするべきだと思いますか。自分の意見を書きましょう。	各自で分類・整理した道具の特徴の表	【①市場主義的価値が優先される理由】 ・使いやすくて安いものは，快適な生活に欠かせない。生活をもっと便利にしていくためにも①の価値をこれからも大切にするべき。 ・洗濯機や洋紙がなければ，生活するのに不便。 【②伝統主義的価値が優先される理由】 ・質のよいものを使うようになれば，みんなが無駄遣いしなくなる。エコにつながる。 ・自然環境を大切にしながら，ものが作れる。 ・地域の文化や伝統が守れる。
③価値の再吟味	○それぞれの意見についてどう思いますか。		【①市場主義的価値が優先される理由】 ・和紙は値段が高い。質にこだわると値段が高くなってものが買えなくなる。 ・洗濯機やそうじ機はわたしたちの生活をよくするために，改良されてきた。伝統も大切だが，このような快適な生活を守ることも大切ではないか。 【②伝統主義的価値が優先される理由】 ・今のままでも生活は十分に快適である。これからは②の価値を大切にしてエコな生活をした方がよい。 ・便利な生活のためなら自然や文化や技術を犠牲にしてもよいのか。引き継がれてきた地域の伝統文化を大切にする必要がある。
④価値の再調整	○友達の意見を聞いて①と②の価値について考えたことを書きましょう。		※各自作文で自分の考えを述べる。 ・楽な生活のために，自然を犠牲にするのはよくない。機械や電気の力を頼らずにできることを増やしていったほうがよいのではないか。 ・①を大切にしたら自然によくないし，②を大切にしたら不便になる。①と②のバランスをとりながら，生活を工夫する必要がある。

４．評価規準

第１次　「昔の道具を調べよう」	第２次「なぜ三隅の和紙は残っているのだろう	第３次「これから大切にすべきことは何か」
・電化商品をはじめとする道具は，「簡単に手に入り，手間がかからずに，誰にでも同じようによい仕事ができる道具がよい道具である」という価値に基づき変化してきたことがわかる。	・「自然や地域の材料を生かし，もののよさを重視する職人の熟練した技によって作られたものがよいものである」という考えから石州和紙は作られ続けていることがわかる。	・２つの道具のよさや生活にあたえる影響を考え，市場主義的価値と伝統主義的価値について評価する。また友達 との意見交換を通して，ものに対する多面的な価値認識を獲得する。

【参考文献】

①石州半紙技術者会・石州和紙協同組合　http://www.sekishu.jp/
②紙の博物館　http://www.papermuseum.jp/
③西田和紙工 http://www.pool.co.jp/nisidawasi/
④石州和紙技術社会・石州和紙協同組合『石州半紙　石州和紙』パンフレット
⑤みんなの森 http://www.minnanomori.com/index.html
⑥特殊紙商事株式会社　http://www.tokushu-papertrade.jp/index.h

（3）第3次「三隅の和紙作りは続けるべきだろうか」

第3次は，「価値吟味過程」の段階である。三隅町では和紙作りの職人の数は減り，和紙の需要も減りつつある。この状況に対して，地域をあげて三隅の和紙づくりを存続させようする動きが活発化している。それぞれの社会状況の背後には市場主義的価値と伝統主義的価値という，相反する価値が存在していることを認識した上で，2つの価値について評価する。学級全体での話し合いを通して，価値を吟味・調整し，「もの」についての多様な価値認識を形成することが目的となる。

Ⅵ. 研究の成果と課題

本研究では，我々が日常的に使っている「もの」の背後にある価値を明らかにし，社会に与える影響から分析・吟味することを通して多面的な価値認識を保障する授業設計を行った。本研究の成果としては，下記の点をあげることができる。

第1は，小学校中学年の社会科授業において，子どもの多面的な価値認識を保障する方法として，行動様式を直接的に規定する「もの」を分析対象として取り上げ，その背後にある価値を相対化する方法を明らかにしたことである。主に中等教育において提案されている制度や法，社会的判断を分析する価値学習に対して，「もの」を分析対象とする授業を開発したことは，小学校社会科の価値学習の実践に資すると考える。

第2は，これまで，「地域の人々の工夫や努力」を理解することを目的になされてきた，「もの」を教材とする授業を，子どもの多面的な価値認識を保障する授業に転換する方法を明らかにしたことである。昔の道具の変化の背後にある価値と伝統的工芸品のそれを対比することで，価値を相対化する授業構想を示したことに意義がある。

今後は，このような授業構成が今回取り上げた「もの」以外の教材にも応用可能であるか，判断の背後にあるどのような価値や規範を取り上げることが教育的に求められるかを明らかにすることが課題となる。

【註】

1）文部科学省『小学校学習指導要領解説　社会科編』東洋館出版，p.19，2008

2）溝口和宏「開かれた価値観形成をめざす社会科教育―『意思決定』主義社会科の継承と革新」全国社会科教育学会『社会科研究』第56号，pp.31-40，2000年

3）大杉昭英「社会科における価値学習の可能性」全国社会科教育学会『社会科研究』第75号，pp.1-10，2011年

4）吉村功太郎「合意形成能力の育成をめざす社会科授業」全国社会科教育学会『社会科研究』第45号，pp.41-50，1996年

5）溝口和宏「開かれた価値観形成をめざす歴史教育の論理と方法―価値的知識の成長を図る四象限モデルの検討を通して―」全国社会科教育学会『社会科研究』第77号，p.4，2012年

6）溝口和宏『現代アメリカ歴史教育改革論研究』風間書房，pp.81-84，2003年

7）この図は以下の文献をもとに著者が作成したものである。

①梅津正美「規範反省能力の育成をめざす社会科歴史授業開発－小単元「形成される『日本国民』：近代都市の規範と大衆社会」の場合－」全国社会科教育学会第73号，2010年，p.2.

②溝口和宏「歴史教育における開かれた態度形成－D・W・オリバーの『公的論争問題シリーズ』の場合」全国社会科教育学会第42号，1994，pp.41-50.

③田中成明『法理学講座』有斐閣，1994，pp.81-107.

8）森川敦子『子どもの規範意識の育成と道徳教育―「社会的慣習」概念の発達に焦点づけて―』渓水社，2010年，pp.17-28

9）溝口，前掲書，2000年

10）大杉，前掲書，2011年

11）寺西和子「経験と知識創造」『教育方法学研究』第17巻，1993，p.62

12）文部科学省『小学校学習指導要領解説　社会科編』東洋館出版，p.40-41，2008

13）佐伯啓思『経済学の犯罪－稀少性の経済から過剰性の経済へ』講談社現代新書，2012